第一に軍事的優秀性に基礎づけられたものでなければならなかつた。然るに八旗兵の軍事的優秀性なるものは實は多分に傳說的假評なりし事、歷史的には實は絕對的なるものではなく、當に漢民族の軍事能力の消長に對應しての相對的優秀性に止まれるものなりし事が次第に暴露せられるに至り、遂に髮賊の亂を契機として漢人を自衞に蹶起せしめ滿人の軍事的自立性は殆んど全く喪失せられて清朝支那支配の第一の基礎は崩壞するに至つたのである。（第一講、兵力上の變遷）一方財政面に於ては、端的なる節儉政策に依つて齎されたる豐潤なる國庫蓄積も、中葉以降國事漸く多端に、末期對外賠償累積するに及んで全く空缺を告げ、又異民族王朝なるが故に意識的に反復强調しなければならなかつたゼスチュアー的「善政」としての廣汎なる免賦も、官僚の中間搾取に逢つては空しきポーズとしてのみ止まり、財政經濟面に於ても亦末期的症狀を展開するに至つた。（第二講、財政經濟上の變遷）而も他面外國勢力の壓迫に依て覺醒せられし民族意識は排滿思想に轉化發展し、御用學的〃漢學〃は衰退し、〃宋學〃思潮は孔子崇拜より更に讀書人自身に身近なる存在たる諸子の崇拜へと、彼等の自我の主張を依托せしめて一層の發展を示し、西歐共和主義思想の影響漸く顯著なるものあり、清朝政權の理論的基礎亦崩壞するに至つたのである。（第三講上、思想上の變遷）かくして清朝政權は革命思想の攻勢の前にやがては崩壞す可く運命づけられて居るものと想定せられるものがある。（第三講下、結論）〔以上「清朝衰亡論」〕

以上が本書の概要であるが、本書二篇は共に時間的制約の下に發表せられたる講演である爲め、そこに盛られたる博士の蘊蓄はコンデンスにコンデンスを加へられし精粹そのものであり、精粹の極、博士の蘊蓄の深淵よりの必然的展開なるを解し兼ね間々理論的飛躍を覺えしむるもの無しとせず、又挿話的凸凹も少からず、本書を概要する事は極めて困難である。然し乍ら只、本書が清朝時代を『支那近世史の普遍性と異民族支配てふ特殊性の交錯せる時代。』更に云へば『近世』と『民族意識』てふ二つの歷史概念を以て貫き編まれてゐる事のみは斷言し得よう。ともあれ我々は博士の齎されたるこれ等偉大なる成果を「ドグマ」として只徒らに墨守する事なく、眞に「古典」として歷史の中に正しく把握す可きであらう。（A5四二三頁・東京弘文堂書店發行・定價六圓四五錢）（眞島行雄）

西洋史說苑——昭和十七年度——

京都帝國大學西洋史研究室編

京大西洋史研究室に於いては、曩に故時野谷當三郎教授の還曆記念に際し、研究室關係者一同の西洋史論文を集めて『西洋史說苑』を編し故博士に獻呈し、親意を表したのであるが、本書は、それに引續き、同じく研究室關係者の諸勞作を集めて成つたもので、原隨園教授を中心に一致協力、西洋史學研鑽につとめつゝあるその學的努力の成績である。時局に伴ふ出版界の事情で上梓の豫定が遲れはしたが、收むる所の論文は十八篇の多きに達し、何

れも各人專攻の領域に於ける研究であつて、原教授の序に述べられて居る如く、「京都帝國大學西洋史學徒の、學問報國に示す意義の具現」として、其の公刊が學界の內外に對して意義を持つものと信ずる次第である。

所載論文は西洋史學の諸分野並に時代に亙り極めて多彩であるが、今これを其の主題によつて大別すると、史學史或は史學思想史關係のものが最も多く、原博士の「ヘカタイオス研究」を初めとして、三嘉田熊藏氏「タキトウスの『ゲルマーニア』著作目的に關する考察」、井上智勇氏「アウグスチンの歷史觀」、鹽見高年氏「ブルクハルトに於けるルネサンス概念」、前川貞次郎氏「ミシュレ」とその『世界史序說』、評者の「トレルチに於ける歷史主義の問題」、井上肇氏「ブルクハルトに於ける連續性の理念」あり、次いで宗教史關係のものとして、村田數之亮氏「ミケーネ的『英雄崇拜』について」、岡島誠太郎氏「女神ハトールを通じて觀る埃及宗教の一考察」、水川溫二氏「中世初期に於ける聖人崇敬の變貌」、富本健輔氏「Luther; Von weltlicher Obrigkeit を讀みて」、がある。更に經濟史には、鈴木成高氏「中世商業の性質」、西井克己氏「資本主義概念再檢討の意義」、上之親夫氏「マーカンティリストの自由思想」、思想史に、中山治一氏「二つの歷史主義」、曾田雄次氏「ルネサンス君主論の一性格」、政治外交史關係のものに、豐田堯氏「一八六〇年の英佛通商條約と佛蘭西」、今津晃氏「米西戰爭とマッキンレー」がある。通觀するに、一般に思想史的精神史的問題又はそれに似た取り扱ひ方が支配的傾向たる事を示し、且つ時代別に見れば、ルネサンス以後の近代史研究が半以上を占め、そこに若き人々の近代史への關心の强さを物語るものがある。

我々は現在有史以來未曾有の大戰爭を戰つて居る。戰爭完勝の道が、單なる一局部の戰鬪に執はれざる全局面の綜合的觀察を俟つて初めて打開される事は、平凡な眞理でありながら、其の實行は決して容易ではない。我々は個人の日常生活に於いてすら、區々たる一面しか見得ない狹隘な施策が如何に有害であるかを痛感して居る。況や國家百年の大計は、爲政者の最も廣い視野と最も深い洞見とを不可缺の要件とする事、こゝに冗論するを要せぬ。國家の世界史的聯關性を忘却した近視眼的空理的獨善的な國政運營の方途が國家にとり如何に危險であるかは、世界史のあらゆる頁に其の例證が刻されて居る。かゝる意味に於いて西洋史研究は學的研究としての意義を越えて、國民各層に高邁なる眼識と透徹せる洞察力とを植え付ける好適の教材として直接國家に役立つものであり又役立たねばならぬ。研究室內の薄暗い書架の下、一見迂遠に見える孜々たる其の研究から生れる業績は、其の儘國家を動かす原動力たる可きもの、『西洋史說苑』に結晶せる京大西洋史研究室の學的成果は、學術精神に徹する事が直ちに國家に對する最大の寄與を成す事實の好き典型となるものである。（目黑書店刊行・定價五圓四拾錢）（兼岩正夫）

滿洲・支那（世界地理政治大系）　米倉二郎著

滿洲・支那を論ずることは至難の業であるが、本書はよく東洋